

第4回

持続可能な生活道路除排雪の在り方検討会

議 事 録

日時：令和7年3月10日（月）午後2時開会

場所：ORE札幌ビル8階会議室5

1 開会の挨拶

○事務局（若林事業調整担当課長）

それでは定刻となりましたので、ただいまより「第4回持続可能な生活道路除排雪の在り方検討会」を開催いたします。

あらためまして、雪対策室事業調整担当課長の若林でございます。本日はよろしくお願いいたします。まず始めに、事務局を代表して、建設局長の荻田より、ごあいさつ申し上げます。

○事務局（荻田建設局長）

建設局長の荻田でございます。委員の皆様におかれましては、年度末のお忙しい中お集まりいただき、本当にありがとうございます。

事務局を代表しまして一言ご挨拶をさせていただきます。

まずは今冬の状況を振り返らせていただきますが、皆様ご存じの通り、1月下旬頃まではかなり雪が少なかったことから、排雪を希望する町内会にご利用いただいているパートナーシップ排雪制度について、1,352件の申請のうち、2割ほどの328件において、利用をキャンセルする旨の連絡がありました。

しかし、2月に入り、まとまった降雪があったことで、利用をキャンセルした町内会の方々が、生活道路の排雪をどうするかということに悩まれ、スケジュールが調整できる場合は、再申請し、作業時期を後ろ倒しにしてパートナーシップ排雪を実施するなど、例年とは異なる冬になったかと思えます。

2月中旬にも雪が降りましたが、今年は比較的雪の少ない地域が多いシーズンだったかと思えます。これから気温が上がってきて、春を迎えますが、特に除雪事業者の方々には大変お世話になりました。

今回が4回目の開催ですが、これまで委員の方々には、地域や事業者の現状や課題、各種ボランティア活動の取り組み、除排雪手法に関する提案などをいただいたところです。

これまでの検討会の振り返りを含めて、後ほど事務局からご説明させていただきますので、本日も忌憚の無いご意見をいただければと思います。限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願いいたします。

2 資料確認ほか

○事務局（若林事業調整担当課長）

ここからは着座して進めてまいります。お手元にお配りしている資料の確認をお願いします。

まず、会議の次第ですが、資料1から資料3として、座席表、委員名簿、事務局説明用資料を置いております。

また、委員の皆様には、『意見交換取りまとめ（仮）』ということで、第1回～第3回までにいただいた意見を項目ごとに記載した資料を、未定稿ではありますが、お配りしております。

配布漏れなどございましたら、お届けいたしますので、挙手をお願いします。よろしいでしょうか。

次に、出席委員数をご報告いたします。

本検討会は9名の委員により構成されておりますが、本日は、9名全員の委員にご出席いただいております。

それでは、議事に移りたいと思います。ここからは、高野座長に議事進行をお願いしたいと思います。高野座長よろしくお願いいたします。

3 議事

○高野座長

よろしくお願いいたします。

今日の議事といたしましては、生活道路の除排雪などに関する事務局説明の後に、委員の意見交換を行うという流れになっています。

まず、この会は検討会ですので、結論を出すという趣旨ではないということでございます。

これまでの検討会で様々なご意見を頂戴したところですので、今日はそれらを振り返りながら、さらに意見交換していければと思います。

また生活道路除排雪の試験施工についても、今冬、小型ロータリを用いた作業手法を試していただいたところです。

実際に野田委員の会社で小型ロータリを用いた作業手法の試験施工を行っておりますので、まだ結論は十分に出ていない中ですが、次年度以降、どのように生活道路除排雪の在り方検討を進めていくかについて、皆様方から、これまでの意見に加え、さらに忌憚の無いご意見を頂戴できればと思います。

また、本日は最後の検討会ということになりますので、最後に委員の皆様から、一言ずつ検討会に参加した感想、あるいは将来に向けた思いなど、お話を頂戴できればと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは説明をお願いいたします。

○事務局（神事業調整担当係長）

雪対策室事業調整担当課の神です。私から、お手元の資料3に沿ってご説明いたします。本日は、大きく4つの項目を設けております。

一つ目に、昨年11月に開催いたしました、第3回検討会の振り返りと主な意見内容について。二つ目に、除雪ボランティア活動の取組ということで、東海大学札幌キャンパス様が取り組む、札幌ボランティアプロジェクトの活動レポートなどについて。三つ目に、除排雪作業の試験施工として、今冬実施した、小型ロータリ除雪車による排雪作業の結果などについて、ご説明いたします。

そして最後に、本日意見交換やご議論いただきたい内容について、ご説明いたしますので、よろしくお願いいたします。

まず、前回の振り返りと主な意見内容についてご説明いたします。

第3回検討会では、出入り口前の雪処理負担の低減に向けた取組みについて、意見交換を行いました。

事務局からは、市民の皆様にも協力をお願いしている、市のかき分け除雪後の雪かき・雪処理について、高齢化の進行などから、雪処理の支援やボランティアを必要とする方は、今後も増加が見込まれていること。これらの対応に向けて、今冬は、学生ボランティア活動の取組結果や効果などを確認して検証を進めるといったことについて、ご説明をいたしました。

委員の皆様からは、かき分け除雪後の雪処理には、ボランティア活動など、福祉的な取組だけでは、カバーしきれない部分があるため、地域としても取り組まなければならない課題だと思ふといった意見。

近所で困っている人を手伝うなど、市民が作業を楽しむ、もっと雪かきに自ら積極的に取り組むような機運作りが必要ではないか。例えば、雪かき体操や雪かきダンスなどを取り入れてはどうかといったご意見。

市が小学生を対象に行っている雪体験授業など、今後も10年、20年と学校教育の一環で、除雪をテーマにした雪学習を継続することが重要ではないかといったご意見をいただきました。

次に、生活道路の除排雪作業の手法検証といたしまして、パートナーシップ排雪などの排雪支援制度とは異なる形で、行政による費用負担を想定した、作業手法のケーススタディについてご説明をいたしました。

中段にある表の右側ケース2と書かれた部分をご覧ください。

ここでは、対象延長は除雪対象の生活道路約3,800km、作業期間は50日間などとしたシミュレーションを行い、パートナーシップ排雪の標準断面よりも排雪量を抑制した場合の事業費は35億円という計算結果となりました。

こちらのプラスアルファ分は、想定する排雪量によって、事業費が変動することを意味しておりますが、ピーク時の最大作業班数といたしましては、将来的に見込まれる担い手の減少を想定した、90班という体制にも収まる結果となりました。

この結果は、表の右側、今後の検証課題のとおり、幹線道路の除排雪作業などの工程や各区地区毎の除排雪体制の調整が必要な状況で、作業の可能性について皆様にご説明をさせていただいたところです。

こちらの行政による費用負担を想定した、除排雪作業の手法検証のシミュレーション結果について、委員の皆様から多数のご意見をいただきました。

例えば、パートナーシップ排雪の地域支払・負担額は年々増加傾向にある中、今後、地域の費用負担が無くなるようなことがあれば、費用負担感や不公平感は一気に解消されるのではないかとといったご意見。

先ほどのケース2にありました、想定事業費35億円プラスアルファのアルファ部分について、どの程度の振れ幅を持っているのか。雪の降り方や道路状況などによって様々なケースがあると思ふといったご意見。

生活道路の排雪時期を1月中旬まで前倒し、50日間に平準化することで、幹線道路や通学路の排雪時期と作業が重複するが、幹線道路の排雪は行わず、パートナーシップ排雪だけを行っている業者もいるため、作業班は試行錯誤により、対応できるかもしれないが、やはり排雪作業に使用するダンプトラックの確保が懸念されるといったご意見。

その一方で、ダンプトラックは、幹線道路と生活道路ともに早い時期から少ない台数で排雪作業を継続的に続けられれば、試してみないと分からないが、不可能ではないかもしれないといったご意見。

また、パートナーシップ排雪は昼作業が多い状況ですが、昼夜不規則な作業体制ではなく、効率的な夜間作業を連続できれば、働き方改革にもつながるのではないかとといった、体制面のご意見をいただきました。

このように、手法検証について、沢山のご意見をいただいたところですが、本日は、今冬実施した試験施工についても、後ほど、作業結果の一部をご報告させていただきます。

ここまで、前回検討会の振り返りとなりますが、次に、除雪ボランティア活動の取組についてご説明をいたします。

こちらは、本検討会の高橋委員も所属いたします、東海大学札幌ボランティアプロジェクトの活動内容などをお示ししたものととなります。

除雪ボランティア活動の内容といたしましては、除雪作業にお困りの方から希望を募り、道路から玄関前などの雪かき作業を、学生ボランティアメンバーがローテーションして実施するものとなります。

募集方法については、右下にお示しする除雪ボランティア活動の募集案内文の回覧を町内会に依頼し、地域に回覧して、利用希望者から直接、学生担当者に電話やメール連絡をいただく流れとなります。

今冬の活動結果といたしましては、活動期間は昨年12月7日から今年2月8日まで、今冬は、依頼件数10件に対して、作業時期など調整が整ったところ6件で活動を実施いたしました。

次に、今冬の活動事例について、2月7日に東海大学札幌ボランティアプロジェクトの活動状況を事務局で見学させていただいた内容をご紹介します。

依頼者様からお話を伺うと、昨年体調を悪くして、ご自身では雪かきが困難な状況ということで、現在は、市のかき分け除雪後などに、玄関前の歩道部分をご近所の方が協力して雪かきをしてくださっているとのことでした。

そのような中、依頼者様としては、ご自身が利用される、福祉車両の送迎や乗降りのため、玄関前の歩道部分を少しでも広くきれいに、空けておきたいという思いがあり、今回、町内会の回覧で東海大学の活動を知り、お申込みをいただいたとのことでした。

写真は、ボランティア活動の作業状況となります。

この日は、学生メンバー4名が20分ほどスコップで除雪作業を行い、ご自宅前の歩道に堆積していた雪を、道路脇に移して車の乗降りなどに十分なスペースを確保していました。

依頼者様にお話を伺うと、こういった無償のボランティアは非常にありがたいということで、作業に対する感謝のお言葉もあり、学生メンバーのやりがいにつながっているのではないかと感じたところです。

次に、札幌市が行っている、除雪ボランティア団体等への支援についてご紹介いたします。

一つ目に、除雪用具の貸出制度は、地域で行う除雪ボランティア活動への支援として、スコップやスノードンプなどの除雪用具の無償貸出するもので、今冬は、町内会など55団体から申請がありました。

二つ目の、小型除雪機の貸出制度。こちらは福祉除雪事業の地域協力員の登録団体にもご利用いただいている制度で、令和6年度は市が保有する全ての40台を貸し出ししています。

三つ目に、小型除雪機の購入補助制度、こちらは右側の写真にあるような、安全装置が付いたハンドガイド型の小型除雪機を対象とし、補助金額は購入金額の2分の1以内、上限は50万円となります。

令和6年度は町内会などから、12件の申し込みがあり、うち4団体は過去に小型除雪機の貸出制度をご利用いただいた団体からの申請となっています。

札幌市では、出入り口前の雪処理・雪かきの負担低減に向けた取り組みとして、引き続き、各種ボランティア活動や団体への支援などについて、検討を進めることとしています。

次に、今冬3区4地域の生活道路で実施いたしました、除排雪作業の試験施工のうち、小型ロータリ除雪車による積み込み作業などの結果について、ご説明をいたします。

今冬は、表の3区4地域にて各種試験施工を実施いたしました。このうち、赤枠で囲っている白石区の北郷北部町内会、瑞穂町内会の一部と西区の二十四軒東第6町内会、第7町内会では、右側の検証ポイントにあるとおり、様々な除雪機械の活用として、小型ロータリ除雪車による排雪作業を実施いたしました。

こちらの小型ロータリ除雪車は、パートナーシップ排雪などの排雪作業には使用しておらず、写真にあるとおり、通常は歩道除雪や生活道路の拡幅除雪にのみ使用している機械となりますが、今冬の試験施工にて、排雪する雪をダンプトラックに積み込む作業に小型ロータリ除雪車を有効活用できないかという観点で作業を実施いたしました。

こちらの写真は、左側が白石区北郷地区での小型ロータリによる試験施工の作業状況、右側が大型ロータリによる他区パートナーシップ排雪の作業状況写真となります。

写真のとおり、小型ロータリは大型ロータリより、一回り小さい機械となりますが、ここで、試験施工時の小型ロータリによる積み込み作業の様子を動画でご覧いただきたいと思います。

小型ロータリは大型ロータリと比べて、雪を吹き出すシュートと呼ばれる部分の高さが低い状況ですが、こちらの現場では、10tダンプトラックの後方に、小型ロータリ除雪車を配置し、道路脇の雪山を排雪しています。

ご覧のとおり、ダンプ荷台にうまく雪を吹き付けられている様子が分かるかと思います。また、ダンプトラックへの積み込み量も、適量積載されている状況を確認したところです。

作業状況をご覧いただいたとおり、試験施工の結果から、小型ロータリによるダンプトラックへの積み込み作業は可能な状況を確認いたしました。

次に、中段の表は、小型ロータリによる積み込み作業時間をお示ししたものととなりますが、ダンプトラック1台あたり、積み込み時間は約3分と、作業時間は大型ロータリの約2倍を要する結果となりました。

また、表の左側の機械保有台数にあるとおり、小型ロータリは除雪業者が21台と札幌市が167台の計188台、大型ロータリは除雪業者が148台と札幌市が17台の計165台を保有している状況ですが、今後は、この大型ロータリ165台に加えて、これまで生活道路の排雪作業に使用していなかった、小型ロータリの活用による、除排雪作業の効率化に向けた検証を進めることとしています。

次に、試験施工地域の道路状況の変化についてご説明いたします。

まず、札幌市の生活道路の除雪水準は、左上に示す、断面図のイメージのとおり、幅員確保は1車線プラス歩行空間以上のおおむね3.2m、路面の雪の厚さを示す圧雪厚は30cm程度としています。

こちらの写真は、試験施工を実施した、白石区北郷地区の道路状況をお示したものです。

上段中央の写真をご覧ください。こちらは道路幅員8mの道路となりますが、①の試験施工前2月6日の状況では、通行幅が約3.7m、雪の厚さは約19cmでした。

右側②の2月10日に試験施工を実施し、ここではタイヤショベルで路面の雪を削り、雪山を先ほどの小型ロータリで排雪いたしました。

下段左側、③の施工直後には通行幅約4.5m、雪の厚さが10cm以下までしっかりと路面の雪を削り取り、通行環境を確保したところです。

その後は、降雪などに応じて除雪作業も行いながら、④の施工10日後の2月20日には、通行幅約3.3m、雪の厚さは約14cmと、元の状況に近づく結果となりました。

そこからさらに7日経過した、⑤の施工17日後の2月27日では、通行幅は変わらず、約3.3m、雪の厚さは約12cmとなっています。

このように、道路状況に応じた、日ごろの除雪作業に試験施工による除排雪作業を組み合わせることにより、シーズンを通した冬期道路環境の確保につながる状況を確認したところです。

次に、豊平区西岡地区のパートナーシップ排雪実施地域における道路状況の変化について、ご説明いたします。

通行幅は写真からの推定値となりますが、道路幅員8mの生活道路において、上段左側①の施工前2月10日は通行幅3.2mよりも広く確保されている状況となっています。

この地域では、2月14日にパートナーシップ排雪が実施され、下段のイラストにある通り、左右1m程度ずつ雪山を残して、6m程度の幅を確保しています。

②は施工3日後の2月17日の状況となりますが、通行幅は6m程度が保たれた状況で、路面の圧雪も解けてほぼ無くなっている状況が分かるかと思います。

ところが、③の施工11日後の2月25日には、その後の降雪により、通行幅が3.2m近くにまで元に戻っている状況が確認できます。

このように、パートナーシップ排雪や今冬実施した試験施工による排雪作業後に、一度、広く確保された通行幅は、どちらも、その後の雪の降り方などによって、一時的なものとなり、シーズンを通して道路状況は除雪水準3.2mに近い状態が続く状況が確認されたところです。

次に、生活道路の除排雪作業手法の検討課題についてご説明いたします。

まず、一つ目に今冬3区4地域で実施いたしました、令和6年度の生活道路除排雪の試験施工の結果検証では、今後地域アンケートを実施し、メリットやデメリットも含めた結果の評価や分析を行います。

また、除雪事業者へのアンケートなどを実施し、除排雪作業手法の改善点の確認のほか、先ほどご説明いたしました、小型ロータリの活用や排雪作業時期の前倒しなどによる効率的な除排雪作業手法について検討を進めます。

こちらのスケジュール表は第3回検討会でお示ししたものとなりますが、検討中の生活道路の排雪手法については、オレンジ色の帯で示すとおり、1月上・中旬から3月上旬頃まで、生活道路の排雪作業時期を前倒し・平準化することで、幹線道路の運搬排雪などと作業班や期間が重複する部分の検証が必要な状況となっています。

また、検証に向けて、令和7年度も生活道路除排雪の試験施工を予定しており、今後は生活道路だけではなく、幹線道路の運搬排雪などと工程調整しながら、面的に規模を広げた試験施工の実施に向けた調整を進めているところです。

また、引き続き限りある予算、機材、人材のなかでどのような作業が可能かといった観点で検討を進めることとしています。

次に、今後の検討スケジュールとパートナーシップ排雪制度等の排雪支援制度について、ご説明いたします。

札幌市では、令和6年度の「持続可能な生活道路除排雪の在り方検討会」にて、本日お集りの委員の皆様からいただいた様々なご意見を踏まえて、令和7年度より、新たに「札幌市雪対策審議会」の設置を予定しています。

審議会では、幅広く持続可能な除排雪体制の在り方などについて、議論や検討を予定しており、パートナーシップ排雪などの排雪支援制度については、令和7年度も制度を継続しながら、見直しなども含めた検討を進めることとしています。

今後は「冬期道路環境など除排雪水準」や「除排雪の手法・体制の検討」など、生活道路除排雪の在り方も含めて、除排雪全体で議論・検討を行う予定です。

最後に、本日、第4回目の検討会で、意見交換やご議論いただきたい内容について、ご説明いたします。

本日、意見交換のテーマとして、一つ目に、これまで皆様から多くのご意見をいただきました、除雪ボランティア活動の在り方について。二つ目に、生活道路除排雪の作業手法について。

それぞれ、第1～3回検討会での主な意見内容も振り返りながら、本日も幅広く意見交換、ご議論いただきたいと思います。事務局からの資料説明は以上となります。

○高野座長

はい、ありがとうございました。

最後のスライドにご議論いただきたい2点について記載があります。

1点目の除雪ボランティア活動について、出入り口前の雪処理は、それぞれの住民が自分でやるのが原則ですが、様々な事情でできない場合もあるということで、それを補う福祉関係の取り組みとの関係のあり方に関することです。

2点目は、事務局より最後にご説明いただいたとおり、パートナーシップ排雪制度に様々な課題がある中で、今後の生活道路除排雪の在り方をどのように考えるかということです。

1回目から3回目の検討会でいただいた主な意見については、スクリーンで表示いただきたいと思います。まずはボランティア活動の関係について意見交換していきたいと思っています。

先ほどの事務局説明資料の中で、これまでの振り返りがされましたが、出入り口前の雪処理は、基本は自分でやる。ただし、様々な事情でできない方もいると思われるので、ボランティアとの連携が必要ということですね。

また、自分で雪処理するということについて、プラスの面をアピールする、子供の頃から雪体験授業等で除雪の必要性を感じてもらうことが重要ではないかなど、いろいろご意見を頂戴しております。

まず除雪ボランティア活動について、先ほど事務局説明でご紹介がありましたとおり、高橋委員が今冬もボランティア活動をやられたので、感想を含めてご意見をお聞きしたいと思います。

○高橋委員

先ほどもご紹介あった通り、東海大学札幌ボランティアプロジェクトのリーダーを務めていましたが、現在はほぼ引退しており、活動を見守っている立場です。

まず我々のボランティアの方法を簡単にご説明させていただきます。

本活動は、企画の段階から学生が行うものになります。企画にあたっては、南沢地区の連合町内会様と、高齢者が多い地区の確認や、除雪ボランティアを行う期間についての調整などを行います。

その後、保険会社とのやり取りをさせていただいた後に活動開始し、例年12月後半から2月まで活動させていただいております。

活動にあたっての感想ですが、思うように活動ができないというのが正直なところです。

まず、12月後半から活動するのですが、学校もその期間は冬休みになるため、ボランティアを行う学生の意欲が低下します。

除雪ボランティアのためだけに学校に来ている学生は多くないというのが現状で、これがとても大きな課題だと考えております。

○高野座長

ありがとうございます。

ボランティアといっても、冬を通して活動できるわけではなく、当然学生さんにも様々な事情があるということですね。

他はいかがですか。

○高木委員

札幌市社会福祉協議会の高木です。

我々は福祉除雪事業を行っていますが、除雪に限らず、日頃の地域住民同士の支え合いを進めることを目的に仕事をしている立場ですので、そのような視点から思うことをお話します。

除雪ボランティアについては、日頃より様々な相談をいただくのですが、大きく2種類に分けなければいけないような気がします。

一つ目は、活動日時が事前に決まっているボランティア、二つ目は、雪が降った日に除雪を行うというボランティアです。

この二つは、コーディネートする側としては、大きく内容が違います。

当然、事前に活動日時を決めた方がコーディネートしやすく、また、ボランティア未経験の方も含め、活動に参加しやすいです。

ただ、福祉除雪を含む、雪が降った日に除雪を行うボランティアについては、協力員を見つけることも、コーディネートすることも難しいと思います。

福祉除雪のような地域の支え合いは、除雪に限らない話だと思います。日々、地域の方々が顔を合わせて関係を作っていく中で、ゴミ出しや見守りなどの生活全般の支え合いの中の一つとして除雪が含まれるというのが、本来の形なのだろうと思います。

ただ、地域でそのような体制を作っていくというのは、簡単ではありません。

両方のボランティアも大切な活動だと思うのですが、拡大しやすいのは活動日時が事前に決まっているボランティア活動なのかなと思います。

○高野座長

ボランティアする方の事情もあるので、活動日時が事前に決まっている方が活動はしやすいですが、実際に、よりニーズが高い、市のかき分け除雪後の、出入り口前の雪処理を行うような活動は、活動日時が不定ですから、近隣住民のコミュニティの中でも担っていければ理想的だということですね。

○有田委員

地域の立場から言わせていただくと、降雪後の出入り口前の雪処理対応については、近所の助け合いが中心になると思います。

その一方、事前に日時を決めて、本格的に玄関から道路までの通路作りを行うなどの活動はボランティアをお願いするなど、複合的な組み合わせだと地域として対応しやすいと感じました。

地域ボランティアについて、今は福祉除雪が中心となっていますが、仮に今後パートナーシップ排雪に代わる排雪手法が導入された場合、間口処理をどのような頻度で行う必要が出てくるのかを知りたいと考えています。

今年度3区4地域で実施している、生活道路除排雪の試験施工で確保する通行幅を4.5mにした場合、どんな頻度で地域が間口処理をする必要性が出てくるかということを知りたいのです。

それに対して、地域や大学生、除雪ボランティアがどのように対応していくかということが重要だと思います。

地域の中学生や企業などと連携できれば、福祉除雪の一部をその方々に担っていただけるということも考えられるかもしれません。

それに加えて、シルバー人材の活用など、地域として様々な手段を組み合わせていくということが必要だと感じています。

ただ、これらの活動をどこでコーディネートするかという課題があります。

町内会の情報が集まること、また、地域として主体的に対応することを考えると町内会長が適任と思いますが、まずは作業で確保する通行幅が4.5m になった場合、道路がどのような状況になるかを示すことが重要と考えます。

○高野座長

今までよりさらに間口除雪の必要性が高まるのか、ということですね。

○原委員

やはり、学生ボランティアが間口除雪の軸というか、中心にはならないかなと思っています。

間口除雪を、市のかき分け除雪後に時間を開けずにやるとすれば、福祉除雪のような、有償の除雪協力員のようなシステムが構築される必要があると思っています。

その上で、地域、学生、生徒などが、雪が降ってなくても間口を大きく広げるなど、オプションの取り組みをすることが良いかと思います。

また、有償の除雪協力員のようなシステムを町内会でコーディネートすることは難しいかもしれないと思っています。

ですので、行政なのか、それとは違う位置づけなのかはわかりませんが、全体をコーディネートする組織が必要なのかもしれないと思っています。

福祉除雪の地域協力員の謝礼が1世帯あたり21,000円でも協力員が足りない状況ですよ。

謝礼額をあげればもっと集まるのか、それともそれ以外の原因で集まらないのかということについても、調査する必要があると思います。

また、学生ボランティアについても、単位を貰える、就職に有利など、もっと社会全体としてインセンティブをつけるような取り組みを行い、ボランティアすることで、有形、無形の便益が沢山あるような状況を作っていくことは必要だと思います。

福祉除雪が間口除雪の柱になると思うのですが、それに加えて、学生などがボランティアに参加しやすい社会状況を作るためには、全体を束ねてコーディネートする組織が必要ではないかと思っています。

もう一点気になるのは、業者の方、ボランティアの方も含め、比較的多くの方が、住宅周りで雪処理する際、事故にあっているということです。

業者の方でさえ、屋根の雪処理時に事故にあい、2、3人が亡くなってしまうこともありしたので、心配です。

屋根に上がることは高所作業になるなど、やはり除雪作業には一定の危険性があるため、業者の人に対しても、保険を掛けるだけではなく、研修などを通じた安全対策について、全体として取り組む必要があるのではないかと感じています。

○有田委員

屋根の雪降ろし作業に関しては一般のボランティアがやれる作業ではないですし、北海道の住宅は頑丈ですから、屋根の雪下ろしは必要ないといったアナウンスをすることが効果的かと思っています。

○高野座長

今までは、出入り口前の雪処理は各々に対応していただき、なんらかの事情でできない方は、福祉除雪でフォローしていました。

札幌市には、今ご意見いただいたようなあらゆる手段を講じて、出入り口前の雪処理をできない方に手を差し伸べる方法や仕掛け、意識改革、子供からの教育などについて、各方面から努力いただくことが重要かと思います。

また、出入り口前の「除雪」ではなく、自宅前に溜めた雪をまとめて「排雪」する、民間排雪というサービスもあり、野田委員の会社でもやられています。

場合によっては自分でお金を払って、「排雪」ではなく、出入り口前の「除雪」を民間業者にお願いするという可能性もあるかと思うのですが、野田委員いかがですか。

○野田委員

除雪業者が出入り口前の除雪だけを受けるということはあまりないと思います。

持続可能ということを考えると、ボランティアにだけ頼ることは不安定さがありますし、かといって、各々民間に頼んでくださいというアナウンスを行政側がしたとしても、サービスを受ける費用を捻出できない方もたくさんいらっしゃると思います。

例えば、入札参加の要件の一つとしてそのような社会貢献をすることに対して評価するというアナウンスのもとに、意識の高い、安定的な企業に協力を呼び掛けるというようなことも必要と考えています。

我々も業界として防災協などでも福祉除雪に協力させていただいており、また、個人としても福祉除雪を行っている方もいますが、どちらも高齢化が進行しています。

また、ボランティアに関する問い合わせやコーディネートなどを取りまとめる組織があれば良いと思いました。

○高野座長

ありがとうございます。

集合住宅に住んでいる人は、除雪ボランティアをしたいと思ったとしても、何をすれば良いかわからないことが多いです。

集合住宅と一戸建てがバランスよく混ざっているエリアであれば、一軒家の手伝いを行うようなことができると思いますが、大抵は集合住宅が固まるエリアと一戸建てが固まるエリアに分かれており、ボランティアしたい人が、活動に結びつきにくく、勿体ないと思います。

○原委員

企業インセンティブについては、一つの企業が行うと他の企業も追従します。そうすると多くの企業にインセンティブが付くので、今度は発注者側が、また新たなインセンティブを考えなければならないので、インセンティブのつけ方については工夫する必要があると思います。

○高木委員

情報提供ですが、インセンティブに関しては、この会議とは別に、福祉除雪を持続的な制度とするための検討会が進められていて、そちらでも同じような話が出てきていました。

福祉除雪に協力してくださってる企業に、あまり大きくないようではありますが、入札時に加点するインセンティブがあると聞いております。

福祉除雪に関する検討会では、そのインセンティブを条件によってはもう少し増やせないか、などの話が出ております。

○高野座長

企業ボランティアについては、仕事に有利になることが重要視されています。

仕事を取るために早朝から雪かきしなければいけない状況になると、目に見えない残業が発生するので、慎重な取り扱いが重要だと思います。

○宮浦委員

高木委員が仰ったように、我々は災防協で行っている取り組みについて、入札時にインセンティブをつけていただいております。

当然、一度インセンティブを付けていただくと、そこから点数を下げたくないの、企業は継続してボランティアに取り組むことになると思いますし、福祉除雪による地域貢献を継続することも企業の役割とっております。

私も福祉除雪に関する事務局を10年程やっていた経験がありますが、この10年間で一般の地域協力員の方が減ってきて、我々企業が担う割合が増えてきてるのかなと思います。

学生のボランティアについても、社会福祉協議会とコラボレーションするようなことができれば良いと思いました。せっかく学生の方がボランティアを行ってくれるということであれば、福祉除雪の謝礼などのインセンティブをつけられれば、学生も集めやすいのかなと思いました。

○高野座長

白井さんお願いします。

○白井委員

例えば除雪をしてあげたいと思ったとしても、全く知らない家だとやりにくいと思います。

それから、除雪をしてもらいたいと思う人も、手伝ってくれそうな人を実際にはなかなか見つけられない状況です。

気軽に除雪をしたり、頼んだりするような簡便なシステムが今はないのかな、と思います。

良いことをすれば気持ちがいいとか、良いことをしてもらったらお礼を言ったりするようなことを、今よりももう少し意識するようになることはある意味で簡単だと思います。

現状では、僕が街を歩いていて、少し時間がある時に、雪が溜まって不便そうな家を見つけ、除雪してあげたいと思っても、住んでいる人が気難しい人だったらどうしようかなどと考え、なかなか声はかけづらいですね。

高野座長も仰いましたが、集合住宅に住んでいる方が他の家まわりを除雪してあげたいと考えても、それを実現させる機会がないと思います。除雪に困っている方の「見える化」ができないのかと思います。

母の日にプレゼントとして肩たたき券をお母さんにあげたりすると思いますが、例えば、除雪お手伝い券のようなものを、1シーズンにつき5枚程度配布し、除雪を手伝い、その券をもらうことで札幌市から何かプレゼントがあるような仕組みが良いのではないかと思います。

除雪を手伝ってくれる方のご厚意と、やってもらった人が感謝の気持ちを、気軽に示すことができる仕組みがあれば、市民の間でうまく広がりそうな気がします。

除雪に係る費用の試算などを行う前に、市民がボランティアに気軽に参加できるようなスタイルを確立できたら、それ自体が、札幌が世界に誇れる要素になるとと思いますし、実現できるのではないかと思います。

○高野座長

例えば、何か教えてもらいたいときとかには、教えてくれる人に地域通貨を渡すようなシステムがあると、直接的な金銭よりもありがたみを感じれるような社会になりそうですね。

○臼井委員

例えば10歳以上の子供が参加できるというような形が作れば、ボランティア団体を作る以前に、市民1人1人がボランティアをするということが期待できるのではないのでしょうか。

ロマンチックかも知れませんが、札幌はそれができる街ではないかと思っています。

○有田委員

臼井委員がとても大事なことを仰ったと思います。

除雪してもらいたいけど誰に頼めば良いかわからない、除雪してあげたいけど、誰に言えば良いかわからない、この二者を結びつけるのは、近所の顔の見える関係作り、つまり町内会活動だと思います。

見守り活動や、防災・防犯と同じように、除雪も大きなファクターとして機能できれば良いと思っています。

仮にパートナーシップ排雪が廃止になり、行政が生活道路の除排雪をする場合、浮いた予算を用いて、町内会で地域通貨を発行するような可能性もあるのかなと思っています。

○高野委員

歩いて作業にいけるということを考慮すると、自分の町内会や、あるいは隣の町内会ぐらいまでであれば、モデル的にでも取組めると良いかもしれませんね。

山口委員は何かありますか。

○山口委員

町内会長の立場として、例えば私が住む町内会では、小型の除雪機でご近所を除雪し、積極的に除雪ボランティアに取り組んでくれている方がおり、とても感謝しているのですが、やはり近所の顔が見えないので、そのような方を誰と結びつけたらいいのかわからないという状況があると感じます。

今年度、私の住む町内会は、出入り口前の除雪をしてほしいという要望が2件あったのですが、町内会で回覧を回して、除雪ボランティアを募集しても集まらず、ボランティアしてほしい人としてあげたい人のマッチングができなかったので、ボランティア活動をコーディネートする窓口の検討は大事だと思うと同時に、町内会単独でやるとなると厳しいのかなと思いました。

○高野座長

ボランティアに関しては、第1回検討会で高橋委員から、「最初は玄関から道路に出るまでの一本道のみを除雪対象にするつもりが、庭など、他の場所も除雪してほしいという人も出てくることで、作業効率が悪い」という話もありました。

ボランティアがどこまで雪かきをするか、ルールも作らないと、両者の間で認識の相違が生じてしまうと感じます。

今までは、出入り口前の雪かきは住民個人で行い、それができない方に対しては、福祉的にサポートするというやり方でしたが、それだけでは不十分だということが見えてきました。

本日ご意見いただきました、大学生、中高生、企業の方々、あるいは臼井委員が仰るような、気持ちの通じ合わせなど、様々なやり方があるかと思うので、そのようなものが拡大していくように、札幌市でも考えていただき、場合によっては予算をつけてボランティアをマッチングさせるシステムを作るようなことができれば良いかと思います。

来年度は審議会を設置するということなので、除雪ボランティア活動についても俎上に載せていただいて、どういう仕掛けをすると、今以上にボランティアの輪が広がるか、またボランティアする人が気持ちよく活動できるかを検討することが重要ということが委員の皆様のご意見だと思いますがよろしいでしょうか。

それでは次の話題に行きたいと思います。

生活道路の除排雪ということで、先ほど、歩道用の小型ロータリを使って生活道路除排雪の試験施工を行ったという事務局説明がありました。

作業時間は既存の手法よりもかかってしまうが、作業自体は可能であるということ、今まで使用していた大型ロータリに加えて、小型ロータリも積込機械に計上できるのではとのことでした。

また、シーズン1回の排雪作業で本当に足りるのかどうかについては、その年の雪の降り方や温度などと大きく関連するので、難しい問題だと思います。

また、2月、3月だけではなく、もっと早くから作業を開始したら良いというご意見も出ております。

いずれにしてもパートナーシップ排雪制度は、札幌で考え出されたユニークな制度として今まで運用されてきたのですが、近年は町内会加入率は下がっており、また、パートナーシップ

排雪を利用しない町内会もいることから、宅配便など、事業者の車両が生活道路に進入できない事態が起きてくるということが考えられます。

また、除雪作業の担い手についても、高齢化などの課題により非常に厳しい状況であり、幹線道路と生活道路の除排雪作業をより効率化する必要があります。

現在のパートナーシップ排雪制度について、将来的な担い手不足などの課題が積み重なる中でも持続可能なものとするため、作業時間帯の変更も含めて、さらに効率的な手法の導入を検討するなど、パートナーシップ排雪制度を含めた生活道路除排雪を見直してはどうかという趣旨で、様々なご意見を頂戴してきたところです。

野田委員の会社で、歩道用ロータリを用いた試験施工を行ったと思いますが、感想や意見をいただけますか。

○野田委員

今シーズン2回、二十四軒で試験施工を行いました。1回目は作業前から雪が少ない状態だったので、路面の雪がほぼなくなるぐらい排雪してしまうような状況でした。

ただ2回目に関しては、2月にまとまった降雪があったので、現場としても、小型ロータリでもある程度は積み込めるということは確認できました。

しかし、問題点もあったと思いますので、事務局説明資料にもあるとおり、小型ロータリだけではなく、他の積込機械も活用するべきと思いました。

地域ごとに様々な事情があり、また、他の除雪事業者の話を知ると、それぞれの地区毎に勤務状況なども違うと感じました。

また幅員4.5mという話が先走ってしまってるのですが、4.5mはあくまでも基準の一つであって、場所によって状況も異なりますので、その辺は地域をよくわかってる除雪業者と札幌市とで調整する必要があるのではないかと思います。

私としては、様々な工夫をすれば、体制面では作業可能ではないかと感じました。

○高野座長

やはり大型のロータリよりも排雪する雪を積み込む作業に時間がかかるのですか。

○野田委員

積み込み時間はかかるのですが、大型ロータリが入れないような狭小道路では、ダンプトラックと小型ロータリが前後に並んで作業を行えるというメリットがあります。

しかし、前後に並ぶのはかなりテクニックがいります。オペレーターが誰しもすぐできるとは限りません。まず慣れが必要ですし、安全対策も必要だと感じています。

また、ダンプトラックの側方から積込作業を行う場合はダンプトラックの運転手には車体側方のあおりを何枚か外してもらう必要もあります。

あおりを取ってもらったタイミングで排雪作業に従事してもらうといった工夫も必要になってくるので、いろいろと考えなければならぬこともあります。概ね実現可能ではなかろうかと思います。

ただ、繰り返しにはなりますが小型ロータリだけにこだわる必要はないと思います。

○高野座長

わかりました。皆さんいかがですか。

○宮浦委員

野田委員が仰ったとおり、例えば細い道には小型ロータリを使い、かつ大型ダンプトラックではなく、小型の4tダンプトラックを活用することが、問題解決の方法の一つになるのかなと思います。

大型ダンプトラックは大型ロータリで積み込む場合にも使うので、幹線道路の排雪作業などとの間でダンプトラックの奪い合いになりかねない部分ありますので、そのような面でも、4tダンプの活用も視野に入れていくことにもメリットがあると感じました。

○高野座長

ありがとうございます。小型ロータリを用いた試験施工は北郷や二十四軒などの地域で行ったということでした。

今まではパートナーシップ排雪制度で、町内会から申請があった路線を地域と費用を折半して排雪していたのですが、これを除雪対象道路全線について、行政が排雪を行うという一つの案が出されてるのですが、これが本当に実現可能かは、様々な課題があるため、手法の工夫などが必要であり、今年の段階で分かることは少ないと思いますが、宮浦委員はどのように思いますか。

○宮浦委員

札幌市全体として、パートナーシップ排雪は問題を抱えてると思っています。

本検討会での意見交換などは大事だと思っていますが、結論が出るにはまだ時間がかかり、引き続き意見交換や議論をしなくてはいけないと思います。

その中で私が感じたことだと、各区地区毎の検証が必要ではないかと思っています。

札幌市は区が10区あり、区ごとにマルチ（複数の企業で構成する除雪共同企業体）が2～3地区あります。

現状、地区ごとにパートナーシップ排雪を行っている割合は異なりますので、除雪対象の生活道路全線の排雪を行うと仮定した場合には、地区ごとの体制面についても検証した方が良いと思います。

現状で精一杯の地区もありますし、正直余力のある地区もあると思います。

札幌市全体として考えると、このままの状況でも対応できなくはないという考え方もありますが、今後、地区ごとの検証も重要になるかと思っています。

また、報道の影響力についても感じました。「幅4.5m」・「小型ロータリ」・「生活道路」という三つのキーワードが出ただけで、町内会では来年からパートナーシップ排雪制度が廃止になり、確保幅員4.5m、小型ロータリで作業という認識ができてしまったと感じています。

業者でも同様の認識を持っている方が多かったのですが、これはまだ現実的な話ではなくて、もっと議論・検討しなければいけないことで、簡単に実現できる話ではありません。

我々としては、担い手の不足が一番心配です。

建設業は担い手不足と言われがちですので、我々企業としても、もっと職員をしっかりと確保して、今以上の除雪体制を取れるような努力はしていかなければならないと思ってます。

ただ、我々は除雪だけを行う企業ではありませんので、行政にも協力いただき、夏場の仕事もしっかりと確保していただいた上で、企業が成り立てば、担い手も確保できると思います。

いずれにしても、担い手不足を心配されないような努力を引き続きしていきたいと思っています。

○臼井委員

これまでは様々な分野において、生活者や消費者といった、サービスの利用者の側に立つことが重視されてきました。

ですが、これからは担い手不足などの課題があり、サービスを届ける側の視点も重視しなければならない時代になってきていると感じています。

例えば学校も、これまでは学生や生徒の立場ばかりが重視されてきましたが、先生のなり手が少なくなり、先生の働き方や立場といった視点も重視されてきている状況だと思います。

これからの除排雪を考えるにあたり、前回の検討会で野田委員から、除雪従事者の「やりきった感」が不足するというような発言がありました。

通行幅4.5m・圧雪厚10cmという事務局説明がありましたが、この作業で除雪をする方々が「やりきった感」をどれだけ感じられるか考えることも大事ではないかと思います。

例えば僕らが印刷会社ととにかく早く、適当な色合いでいいから、とにかくスピードを重視して印刷物を仕上げるようにと、仕事を発注したとしましょう。

しかし、印刷会社としては、しっかりいい色で印刷物を納めたいという気持ちがあり、その完成度が生きがいや仕事の喜びみたいなものになっていると思います。

「やりきった感」は達成感です。それを減じるようなこの手法は、生活者の立場では多少不便があるくらいで許容できたとしても、本当に担い手の方々の満足感があるのかなと思います。

達成感や満足感を得られなかったら、担い手はどんどん減っていくのではないのでしょうか。

若い人は、給料が良くても社会に良くないなど、満足感が得られない仕事はやりたがりません。この手法は、ペーパー上では、体制・予算面でうまくいったとしても、「やり切った感」は得られるのでしょうか。果たして企業は自社の担い手に納得いく説明ができるのかと思います。

もし私が除雪事業者なら、「札幌市からはこの手法での作業指示が出ているが、しっかり雪を取り除いてくれ」といった指示を出しそうで、結果的に本末転倒になるのではないかと思います。

○高野座長

確かに数年前までは、アスファルトまで削るような、綺麗な排雪現場も見たことがありましたが、野田委員としては、通行幅4.5mならやりきった感はいくぶん減じられると思いますか。

○野田委員

4.5m というのはあまり関係ないとは思いますが。

現在は働き方改革で、ずいぶん和我々除雪事業者の動きは制限されていますが、「日曜日だから、雪が降ったけど出動しません」とはなりません。

冬の期間は常にその状況ですが、計画的にシフトを組んで回せるほどの人を用意できてない状況なので、出動する人はいつも同じ方という現状があります。

繁忙期はみんな疲労困憊になりながらも、やらなければならないときはやるという状況で、そこにはやはりやりきった感のようなものはあると思います。

ただ、長時間労働には当然手当がつくので、言葉ではなかなか表現できず、難しいところです。

○臼井委員

NHK で「プロフェッショナル 仕事の流儀」という番組を放送していますが、出演者を支えているのは、自分のやった仕事の完璧さと出来栄なのかと思います。

例えば、庭作りでも、職人の仕事のいいところを褒めて、「これは他の人じゃなかなかできないですね」と感嘆して言うと、作業した方はとても嬉しそうな顔をなさっています。

お金も大事だと思いますが、除雪の場合はこの「やりきった感」がどうなのかという点が引かかっています。

○野田委員

仰る通りで、昔は地域の皆さんもジュースなどを渡してきて、「頑張ってくれてありがとう」と言ってくれるような方がすごく多かったんですね。

今は除雪従事者の方が、いつどこで怒られるんだろうという戦々恐々とした状況の中で作業しています。

ちょっとでも敷地に雪が転がっていたら、すぐにお叱りを受けることもあるので、現場としては怖がりながらやっていますが、昔は違いましたよね。

地域の方も応援してくれていた雰囲気があったので、臼井委員が仰るとおり、何か周りの気持ちがいただければ嬉しいなと思います。

○有田委員

今でも地域の理解は進んできていますし、感謝の気持ちはあると思います。10年以上前の除雪連絡協議会は、苦情大会のような状況でした。

それが、今となっては除雪の実態を学べる情報共有の場になっており、個別の意見・要望に対しても、非常に丁寧に対応してくださっているという印象を持っています。

作業手法については、地域にどのように説明していくかが大事だと思います。

宮浦委員の仰るとおり、まさに今回の問題は、担い手不足の中で、これから除雪が立ち行かなくならないように、何ができるかということだと思います。

地域は報道により、先行した様々な情報が出ている中で、これから生活道路の除排雪はどうなっていくのかと非常に不安に思っております。

今は幅4.5m という一つの数字が独り歩きして、町内会の中でも不安の声が聞こえており、敬老パスの見直し時の混乱と重なりつつあります。

ですから、地域としては、幅4.5m がいくつかの基準の中の一つだということも含めて、ある程度方向性を示したうえで、正確な情報の発信してほしいと思っております。

やはり、これからは実態を理解してもらうこと、新しい除排雪手法を一般市民の方と決めていくかが重要です。

特にパートナーシップ排雪の見直しについては、町内会に対してどのような説明をしていくかがとても重要だと思います。

札幌市がどれほどの豪雪地帯なのか、また、その中でも対応できる体制を確保していたが、人手不足などの課題により、持続可能な手法を検討せざるを得ない状況だということを、しっかりと市民の方にアピール・周知することが大事だと思います。

報道では、通常の除雪とパートナーシップ排雪が曖昧な状態で発信されていると思いますので、それについても整理したうえで札幌市から発信することが必要です。

出入り口前の雪処理負担の軽減に関しても、現在どのような状況になっているかということも含めて市民に発信する必要があると思います。

パートナーシップ排雪制度の見直しについては、町内会の中でも様々な状況があり、受け取り方も違います。

町内会予算の半分以上をパートナーシップ排雪制度に費やしている町内会、幅員10m の道路が多いなどの理由で、あまり費用的な負担は無いが、もっとお金出しても綺麗に排雪してほしい町内会、あるいは除排雪費を町内会費と別で集めているため、あまり影響がない町内会など、様々な状況があります。

また、地域支払額のことだけではなく、大雪など、緊急事態にはどのように対処するかなど、不安に対してしっかりと説明する必要があると思います。

札幌市の生活道路における除雪水準の幅員が3.2mなので、市民に対して、まずは幅員3.2m をシーズン通じて確保するということを示して安心してもらうことが重要だと思います。

その次の段階として、排雪作業のクオリティが変わるとすれば、1回の作業で、現在ほど綺麗になることが当たり前ではないと納得していただくなど、段階を踏んで発信することが重要だと思います。

現状でも様々な紙の広報媒体はありますが、紙媒体だけではなく、動画、あるいはSNSを含めて、市民の方に、世界一の豪雪地帯の中にある札幌が直面する課題について発信することが重要です。

このように段階を踏んで情報発信することで、市民の方の共感が得られると思います。

○高野座長

ありがとうございます。他はいかがですか。

○高橋委員

建設業界の担い手不足について、第1回検討会開催前に、東海大学の学生に建設業界のイメージについてアンケート調査を行いました。

回答者数は50人程度でしたが、イメージが悪いと回答した割合が9割にのぼりました。

このイメージの悪さが担い手不足に繋がってるのではないかと思いますし、私も最初は建設業に良くないイメージを持っていました。

理由としては、実際に夜間に除雪作業をやってくだりありがたいと思う反面、深夜も仕事をしているということの大変さを自分の親世代から聞いていたからです。

これが、学生がなかなか建設業界に行かない理由かなと就活生として思ったところです。

○高野委員

他はいかがですか。

○原委員

近年は、パートナーシップ排雪制度ができた頃の雪の降り方とは全く異なり、年毎に雪の降り方が違うという状況の中で、我々がどの程度雪の降り方を想定できるのかということを考えることがあります。

ある程度想定できれば対策はできると思うのですが、想定は難しい気がします。

想定が難しいと考えると、今持っている札幌市・除雪業者の機械力・マンパワーなどを効率的に使い、かつ今の働き方改革に合うようなオペレーションをするというのは、神業に近く、大変なことをやらなければいけないのではと感じています。

現実的に考えると、地域を熟知している除雪事業者に、一番効率的に作業できる手法を提案していただいたうえで、地域の方々と相談しながら妥協点を探っていくしかないのではないかと感じています。

そういう意味では、夜間の除雪作業のあと、そのまま生活道路の排雪作業をした方が、業界側として効率的だといわれていますが、実際はどうでしょうか。

個人的には、夜間作業から連続するとオペレーターや運転手の疲労が蓄積してしまうと感じるのですが、いかがでしょうか。

○宮浦委員

1月は、夜間に幹線道路の排雪作業を行っていますが、夜間の方が車も人も交通量が少ないので、安全管理の面で作業しやすいです。

また、夜間作業が連続すると体も慣れてますので、昼夜の作業が混在するよりも、夜間だとしても、同じ時間帯の作業が連続する方が働きやすいと思います。

○高木委員

作業手法については特に意見はないのですが、個人的な疑問を述べさせていただきます。

私は札幌市郊外の一戸建てに住んでいまして、私の家を含めて、近所の皆様は民間排雪業者に排雪をお願いしているのですが、週に1回程度排雪してくださるので、道路はとても綺麗な状態です。

私が住む町内会は恐らくパートナーシップ排雪制度を利用していないということを考えると、民間排雪に取り組む業者をもっと増やせた場合、パートナーシップ排雪を行わなくても済むのでしょうか。

もしくは、多少民間排雪に取り組む業者が増え、仮に倍になったところで大勢に影響ないようなものなのでしょうか。

○高野座長

野田委員いかがですか。

○野田委員

民間排雪だと、除雪作業の路面整正ができないという課題があります。

我々民間排雪業者への苦情として多いのは、排雪作業をしたら路面がザクザクになったというものです。

また、民間の排雪業者は入れ替わりが激しく、突然サービスを辞めることも多いので、その度に地域の方たちが、次はどの業者に頼んだらいいか悩むということがよくあります。

大手業者は安定的にサービスを継続できると思うのですが、私どもも民間排雪を縮小しつつ、市が検討している新しい生活道路の排雪作業に人を割り振っていった方がいいのかなと考えているところです。

我々の心苦しいところは、積まれた雪は持っていけても、路面を綺麗に整正してあげられないということです。

業者によっては路面の状態は関係ないと思うところもあると思いますが、民間排雪と市の除排雪の両方を担っている立場としては、路面も綺麗に整えて排雪作業もできるのであれば、それに越したことはないと思います。

話は変わるのですが、先ほど臼井委員が仰ったロマンチックなアイデアについて、私も良いと思いました。

業者、市民も含めて除雪している人たちが、苦しい、辛いことばかりではなく、町内会さんから暖かい思いをいただくような機会や、雰囲気作りがあると素敵だなと思いました。

何かそのような魔法にかけてほしいなと思います。

○高野座長

スウェーデンでは、除雪チームは同じビブスをつけます。

市民の税金で、市のために夜中に除雪をしてくれるチームだと分かるようにビブスを着用します。

市民はそのビブスを見ると、我々の除雪チームが来たと感じ、除雪チームに尊敬の念を持ちますし、また札幌と比較して雪は多くないので、雪が降っていても、そのうち除雪チームが来るから問題ないと感じるようです。

このような取り組みで、市民の皆様の認識を変えていただくのもすごく重要ではないかと、白井委員のお話を聞いて思いました。

○白井委員

ロマンチックついでに言いますと、冬は雪が降ることで、市民の真心に最も触れ合える季節になるというような考え方ができると思います。

夏は自由に生活していると思いますが、冬は雪があるから、親切さ、喜び、感謝に触れられる、そういうものをもたらしてくれるのが雪と考えると、良いことが起こりそうな気がします。

○高木委員

福祉除雪もまさに支え合いの制度であり、本来、単純に除雪をするための事業ではありません。

私も過去、区の社会福祉協議会で除雪の担当をしていた際は、協力員の方々に、「もしよかったら、雪が解けた春以降もこの方のお宅のことを少しでも気にしてほしい。できれば見守っていただき、声をかけてほしいし、また来年も除雪してあげてほしい」という話をさせていたでいていました。

やはり、本来は人間関係があって、その関係の上で、例えば「近所のおばあちゃんが心配だから除雪してあげよう」というのが本来のスタートだと思うのですが、今はなかなかそういった関係がないので、21,000円をもらいながら、除雪スタートで協力員と地域の方の関係ができていけばいいな、というのが福祉除雪のメインの考え方になっています。

そのため、あくまでもサービスではなく、支え合いという形で行っている事業になります。

○高野座長

わかりました。山口さんお願いします。

○山口委員

また現実的な話に戻ってしまいましたが、今回、小型ロータリを用いた試験施工を行い、野田委員からは、ある程度作業できるという話でしたが、実際に検討中の手法で排雪すると仮定すると、どれだけ地域の理解が得られるかということが大きな課題になると思います。

実際に今までパートナーシップ排雪制度を利用している地域では、これまでと同様に綺麗に排雪してほしいと感じる方が多いと思います。

少しでも雪が残っていると、町内会役員に、残っている雪を排雪してほしいというような要望もあります。

検討している手法に移行すると仮定した場合、作業後、パートナーシップ排雪と比較すると少し雪が多く残り、それ以上は市の排雪が入らないという状況になった場合、今後町内会として対策しなければならないと考えています。

やはり町内会である程度の資金を確保して、除排雪作業後にまだ雪が残ってる場合、町内会として民間排雪を頼むというところまで検討する必要があると思うので、試験施工は結果としてどうだったのかを教えていただき、その結果に対して、町内会として対策を講じていかなければならないと考えています。

○高野座長

大変いいご指摘をいただきました。

市では、これから、試験施工を行った地域住民の方にアンケート調査を行うという話を聞きましたが、その結果はまだわからない状況です。

来年度、雪対策に関する審議会を設置するという説明があり、除排雪手法などについて議論いただくとします。

議論にあたって、まずは夜昼の作業の関係について、今はパートナーシップ排雪が昼、幹線道路排雪が夜作業ですが、これをどちらも夜間作業にするようなこと、また、生活道路だけではなく、幹線道路排雪も含め、除排雪全体で作業効率を検討することが重要です。

今まで昼間作業だったパートナーシップ排雪が夜間作業になった場合、作業時は眠れない人も出てくるかもしれません。

また、体制面の検討については、全市だけではなく、各区各地区の単位ごとにしていただき、全ての除雪対象路線が、今回の新たな手法を用いることで本当に排雪しきれんのかどうかというシミュレーションをすることが必要だと思います。

その際、民間排雪の利用状況も付加的要素としては考えなくてはいけないでしょうし、雪の降り方は、年毎に相当なばらつきがあるので、場合によっては2回あるいは3回の排雪作業をしなくてはいけないような状況も出てくるかもしれません。

そのようなときは、山口委員から、町内会でお金を集めるというお話がありましたが、このことをどのように考慮するかということもあります。

また、実際に検討中の手法を実施する際、住民の皆様はどの程度満足するのか、今後行うアンケートが鍵になってくると思いますし、出入り口前の雪処理について、検討中の手法を導入した場合、今まで以上に負担が増えるのかということについても整理していただきたいです。

さらに、臼井委員が仰ったような、除雪従事者のモチベーションも含めて、様々な方面から検討いただいた上で新たな除排雪方法を考えていただく必要があると考えています。

加えて、どうして生活道路除排雪の在り方を検討しなくてはいけないのかということを含めて、どうしたら住民の皆様にご理解いただけるかということも検討の俎上に乗せ、検討していただきたいです。

検討会は結論を出すという趣旨の集まりでは無いので、気負わずに参加できるというメリットがあると思います。

そのような環境だからこそ柔軟な意見がたくさん出てきたのではないかと、今まで皆様の意見を聞いて思いました。

最後に1人一言ずつお話を頂戴して、閉会にさせていただきたいと思います。大変勝手に恐縮ですが、有田委員から反時計回りでお願いします。

○有田委員

これまで開催された4回の検討会で町内会長の立場として様々な意見を申し上げたところですが、情報発信が重要だと思っておりますので、役立てていければと思います。

一点、蛇足ですが、事務局説明資料の15ページを見ていただけますでしょうか。

中央の写真はパートナーシップ排雪作業直後で、6m程度の幅員を確保できていることが分かります。

対して、14ページ下段左側の試験施工作業直後の通行幅は4.5mとなっています。

地域住民はこの二枚の写真の状況を知りたがっていると思いますので、これは具体的な良い情報かと思います。

それに加えて驚いたのが、幅員6mで排雪した11日後の状況と、4.5mで排雪した10日後の状況は似たような状況になっているということです。

○高野座長

実際には雪の降り方による部分もあるとは思いますが。

○有田委員

これは地域の方に対する情報が詰まっていると思い、発言させていただきました。

良い意見交換ができたと思います。ありがとうございます。

○高野座長

では、高木委員お願いします。

○高木委員

私は第1回に出させていただきましたが、第2回、第3回は出られず、係長に代理出席していただいていた。

全4回の検討会を通じて、普段、福祉除雪事業を行うにあたっては、道路除雪と大きく関連しておりますので、知識を得られたことはとても大きかったと思いますし、また皆さんに対しても福祉除雪や、地域の支え合いについてお伝えできたことは大変意義があったと思います。

正確な数字は持ち合わせていないのですが、福祉除雪は、毎年2割程度の方が利用を辞めており、2割プラス少し程度の方が新規で申し込んでくるので、少しずつ利用者が増えているという状況です。

利用を辞める2割の方がどうして辞めてるのかははっきりしません。

こちらで詳細な調査はしていませんが、亡くなられた方もいれば、施設に入られた方もおり、またサービスが不要ということで辞められた方もいらっしゃると思います。

過去に申し込みを辞めた方に対して電話をしたところ、施設に入られたという方も一定数いました。

福祉除雪の利用者に限りませんが、自宅で生活していた方が施設に行かれた理由として、介護が必要な状態になり、自家で暮らすのが難しくなったという方もいらっしゃるのですが、それよりも、自力で生活する自信がなくなってきたとか、自身の身に何かあったら心配だからという理由で予防的に施設に入られたり、家族に勧められて入る方がとても多いような気がします。

もしかしたら、日々の不安の大きな一因として除雪があるのかもしれないと感じています。

そのため、あくまで雪かきではありますが、結果的にその人がその家で暮らし続けるかどうかに関わっているということを、福祉除雪に携わりながら思っていました。

次年度も検討は続くと考えておりますので、より良い方向性を示していただければと思います。

○高野座長

では高橋委員をお願いします。

○高橋委員

私は2・3回と欠席しておりましたので、第4回は久しぶりの出席でした。

私は社会経験が少なく、知識も無いのですが、検討会に参加させていただいたことは貴重な経験だと思っております。

私から最後に2点あります。1点目が、ボランティアする際、玄関前から道路までの一本道以外に、庭の除雪を頼まれることもあると高野座長からお話があったのですが、確かに作業効率は悪いのですが、よく考えてみると、そこで地域住民との関わりができたのかな、とも思います。

例えばルールをしっかりと制定すると、除雪して、また別のお宅の除雪をして、というように、効率的ではありますが、地域住民との縁が切れてしまい、学生の成長を考えると、良くない側面もあるのかとも感じました。

最後に札幌ボランティアプロジェクトに、生まれも育ちも南区の一歳年下の後輩がいるのですが、幼い頃から私達の学生ボランティア活動を目にしていたことがきっかけで、本活動に興味を持ち、現在活動しています。

その人は次期リーダー候補であり、そういう学生がいるということが私のやりがいにもなります。

持続的というのは、こういうことなのではないかと思いました。この度は、本当にありがとうございました。

○高野座長

それでは臼井さんお願いします。

○臼井委員

様々な方々から、雪との生活についてご意見を拝聴できて、なるほどと思うことがたくさんありました。

「雪は天から送られた手紙である」という名言がありますね。

雪への対応は、天からの手紙に、我々がどういう返事を書くのかということが問われているのだと思います。

世界の200万都市の中で、札幌だけがこんなに大変な降雪の中で、様々の都市機能を保って生活している事実があります。このため、札幌式のライフスタイルや、人々の心のふれあいのようなものがどうしても必要で、それが札幌のアイデンティティになるのかなと思いました。

第1回検討会で除雪は助雪、除く雪は助ける雪とも読み取れると発言しました。

おそらくどんな除雪方法でも、ある程度方針が決まれば今の時代なら技術的には対応が可能なかなと感じています。

それならば、札幌市民としては、雪は辛い、苦しいものではなく、人が温かく触れ合う季節にしていくきっかけになるというような返信を天に返したいという気持ちでいます。

「雪のおかげで札幌に助け合い・支えあいthat定着して、こんなに素敵な街になりました」というような返信を、この50年ぐらいで実現したいなと思います。

最後までロマンチックでした。

ありがとうございました。

○山口委員

臼井委員のロマンチックなお話に聞きほれていました。

様々な立場の方の雪に関するお話を聞くことができて、とても勉強になりました。

地域に持ち帰って、いろいろ検討していくことも必要なかなと思っております。

私は第3回検討会を欠席しておりましたが、検討会開催直後の報道の影響か、検討会翌日の町内会の役員会では、皆様が「パートナーシップやめるんだね。もうお金を集めなくて良いね」というような話をしていました。

パートナーシップ排雪制度の廃止は決定事項ではないことを伝え、その後白石区土木センターからお知らせ文の送付があったので、回覧でも、パートナーシップ排雪制度はまだ継続することを周知いたしました。

やはり、報道などを目にとると、一部の文言だけを切り取って理解してしまうところがあるので、注意しなければいけないと思いました。

また、除排雪作業の試験施工のお話もあると思いますが、排雪作業の効率化にあたっては、雪の堆積場所の問題もあるかと思っています。

私達の地域は雪の堆積場所がとても遠く、ダンプトラックの往復に3時間ぐらい要する状況でした。

今年度は、昔白石区役所があった場所を雪の堆積場所として使用できるようになったことで、除排雪がとてもスムーズに終了したと感じています。

効率面でもダンプトラックのドライバーの働き方の面でも、雪の堆積場所は大きく関連してくると思いますので、令和7年度以降、ぜひ検討していただければと思います。

○高野座長

野田委員をお願いします。

○野田委員

ありがとうございます。先ほど事務局から試験施工地区の写真提示がありましたが、この写真が1人歩きしたら困るかと思いました。

白石区では、パートナーシップ排雪に近いぐらい圧雪を削っているのですが、パートナーシップ排雪に近い作業だと思って見ていましたが、今後想定されているのは、おそらくここまでの路面状況ではないと思いました。

我々は、多少路面整正をしても、そこまでは削らずに、脇に寄せられた、今までの除雪作業で溜まった雪を排雪することが、これからの排雪手法になるのではないかと感じています。

試験施工は実施した地域によっても状況が変わってくるというところもあるため、今後はさらに範囲を広げて様々な道路条件で実施すべきだと思っております。

そういう意味では、引き続き時間をかけて検証していく必要があるのかと思いました。

そして働き方の面につきましては、臼井委員にかけられた魔法を忘れずにいたいです。昔もロマネット計画など、ロマンチックな名前の計画があったと思いますので、今後策定される除雪計画も、「札幌ロマンチック除雪計画」のような、ロマンチックな名前にしても面白いかと思いました。

市民が「なぜそのような名前が付いたんだ」と注目するような、心が温かくなるような計画名も素敵かと思いました。

○宮浦委員

余談ですが、昨年、高橋委員と同じ東海大学からわが社に入社して、とても頑張っている新卒社員がおります。

我々事業者や、除排雪に関わる市職員は、みんな専門の勉強をしてこの業界にすることが多いという認識がありましたが、その新卒社員は土木専門ではない方でした。

学生として4年間大学に通っても、正直自分の将来は決められない状態の方が多いと思います。

やりたいことが決まっていない状況からでも建設業界に入り、頑張ってる方がいるという現状があるので、我々としても、人員確保に向けて明るい未来が見えたのかなと思っています。

今回の検討会で、建設業界ではない委員の方たちにも、建設業界について理解していただいているということに感謝申し上げます。

確かに担い手不足という問題はついて回りますが、我々はしっかり人材確保していく努力をしていく考えです。

また、繰り返しになりますが、我々は建設業者であり、除雪業者ではありません。

夏の仕事もあって、初めて冬の仕事もできるため、夏の仕事についても、行政でも確保していただいて、その中で担い手を確保し、体制を維持していくことが我々の使命だと思っております。

先ほど臼井委員が仰ったとおり、我々はプロの仕事と自負しておりますので、働き方改革という言葉が邪魔してるという言い方は語弊があると思いますが、正直従事者側としては、皆真つ当な姿勢で仕事をしているつもりです。

その中で、少しでも持続可能な形を模索していけたらと思いますので、今後ともよろしくお願いいたします。

○原委員

まず、今回の、「持続可能生活道路除排雪の在り方検討会」は、建設局の雪対策室がやっている検討会だということだと思います。

大きなターゲットとしてパートナーシップ排雪制度について議論されましたが、パートナーシップ排雪制度が策定されたときと今とでは、状況が大きく違います。

まだ札幌市は顕著ではないですが人口が減少しており、高齢化率は札幌市でさえ3割になっています。

雪の降り方も予測不能な状態になっており、オペレーターを含めた除雪事業者の体制も非常に厳しい状況です。

人件費の高騰などにより、除雪予算も上昇傾向であり、札幌市の財政も厳しい状況です。

このように各種制限がある中で、除排雪の在り方について議論をせざるを得ない状況があるということを、やはり市民全体が理解する必要があると思います。

ですので、検討を進めても、バラ色の結果はそう簡単には出ないと思っています。

やはり、提供可能な住民サービスを検討していく中で、その限界を住民にどれだけ納得いただけるかということが大事だと思います。

持っているリソースをフレキシブルに使える体制を構築して、住民に対して、丁寧なコミュニケーションを継続することが、まずは一番重要かと思っています。

除雪という現実的な話とはまた別に、雪があるおかげで、これだけたくさんの観光客も来るなど、冬のプラス面もたくさんあると思います。

以前から、雪の問題はなんでも雪対策室の所管になってしまうということはおかしいと思っており、福祉の関係や教育の関係など、全市的に取り組む必要があると感じています。

来年度は雪対策審議会ができて、事務局は雪対策室ではないとお聞きしていますので、いよいよ全市的に、臼井委員が仰った市民マインドや、高木委員が仰った1年を通じた福祉などがトータルで語られるのではないかと思います。

冬や雪のプラス面なども含めて、札幌市がモデル的で先導的なまちになれるよう、審議会の中で議論されていくことをとても期待しております。

○高野座長

ありがとうございました。

先週の金・土曜日に、八王子にある東京高専で、高専生の研究発表があったのですが、土曜日の午後にみぞれのような雪が降ってきました。

沖縄からもたくさん生徒が来ていたのですが、特に女子生徒たちは雪を初めて見て、とても喜んでいました。

喜んでる姿を見ると、雪を初めて見るとこんなに感動するんだな、と雪に関する先入観を破られ、楽しかったです。

昔から、どのように雪の影響を減じることが重要視されてきたと思います。

網走番外地という、古い映画がありましたが、冬にトラックを運転できるのは運転が特別上手い主人公だけで、他の作業員が運転するとすぐ故障するという設定です。

当時は今ほど道路を除雪していなかったと思うのですが、そのような状況でも主人公だけは運転ができて、各所に物を届けに行ったり、人を助けに行くという物語でした。

時代は変わり、機械の発達などで、誰もが冬でも運転できるようになってきましたが、決して機械の発達だけではなく、社会情勢などの変化が大きく影響していると思います。

原委員も創設に関わったパートナーシップ排雪制度についても、社会情勢や財政状況あるいは技術革新の状況などが変化する中で生み出された制度だと思います。

札幌はこれだけ多くの雪が降り、なおかつ200万人が住むという、雪については世界の中でも一番厳しい状況に置かれている街なので、雪に関する造詣が深く、知恵と歴史が積み重なっております。

そういう意味では、様々な状況の変化を踏まえ、様々な方の知恵を集結して、今後、東北や北陸、あるいは他の雪が多く降る国に感動してもらえ、採用してもらえるような除排雪の在り方を考えていただければと思います。

来年度に向かう準備として、本検討会は各分野の方々から素晴らしいご意見を頂戴でき、また、目から鱗が落ちるようなご意見もたくさんいただきました。

事務局でもよく考えて、大変すばらしい委員の方を集めていただいたと思っております。

本当にありがとうございました。

○事務局（若林事業調整担当課長）

皆様、長時間にわたり、活発なご議論ありがとうございました。

最後に、事務局より2点連絡事項があります。

まず議事録について、後日ホームページで掲載しますが、これまで同様、委員の皆様には議事録案の事前確認をお願いしたいと思います。

また本日お配りしました意見交換取りまとめ（仮）については、第4回検討会の意見を追記しまして、委員の皆様の確認をお願いしたいと思います。なお、皆様が確認していただいた後の意見内容の取りまとめについては、皆さまのご了解をいただければ、高野座長に一任でお願いしたいと存じますが、いかがでしょうか。（「異議なし」と発言するものあり）

ありがとうございます。

それでは、意見内容の取りまとめの一任は高野座長にお願いしたいと思います。

それでは、検討会の閉会にあたりまして、雪対策室長の茂木よりごあいさつ申し上げます。

○事務局（茂木雪対策室長）

皆様、本日も大変長時間にわたり、貴重なご意見をたくさんいただき、どうもありがとうございます。

札幌市では、『冬のみちづくりプラン2018』に基づいて様々な事業を進めております。

これは10ヶ年の計画になっており、そろそろ次期計画を作っていかなければならない段階となっております。

時期計画を策定していくにあたり、本日皆様に意見交換いただいた出入り口前の雪処理をどうするかということや、パートナーシップ排雪制度のあり方のことも間違いなく大事な要素になります。

出入り口の雪処理については、ボランティア、地域コミュニティ、企業の社会貢献などがキーワードになってくるかなと思っております。

パートナーシップ排雪制度の見直しにつきましては、札幌市から一つの案を提示させていただいたところ、宮浦委員、野田委員から、作業面では概ね何とかできるかもしれないが、まだ詳細な検討が必要だというご意見をいただきました。

つきましては、今後更なるシミュレーションをしていく必要があると考えております。

また、作業の水準については、事業者の皆様のやりがいということも含めて、丁寧な市民議論、市民理解が非常に大事だというご意見もいただきましたので、引き続き努力していく必要があると考えております。

本日いただきましたご意見につきましても、次期計画の策定に向けて、しっかりと活かしてまいりたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

今日は最後の検討会ですので、最後に荻田局長の方からご挨拶させていただきます。

○事務局（荻田建設局長）

改めまして建設局長の荻田です。本日は長時間にわたり意見交換いただき、ありがとうございます。

また、本検討会は昨年6月から始まりまして、今回が第4回検討会となりますが、皆様からは貴重なご意見をいただきましたことにお礼申し上げます。

先ほど茂木室長から、お話させていただいた通り、今年の6月頃から、審議会をスタートさせたいと考えております。

審議会の中でも、本日意見交換いただいた、ボランティアやパートナーシップ排雪制度については重要なテーマになると考えています。

近年、除雪関係で、最も件数が多い要望が、かき分け除雪後の出入り口前の雪処理の関係です。

これまで、市民の皆様をお願いしている出入り口前の雪処理ですが、これからも高齢化が進む中でお願いしやすとだけ言い続けられるのかという課題があります。

本日意見交換いただいたボランティアについては、出入り口前の雪処理問題解決のための、一つの切り口になるのではと考えております。

パートナーシップ排雪制度については、第3回検討会で、事務局より一つの案をお示した後、各種報道機関、議会、あるいは各町内会から様々な問い合わせ、ご意見をいただいております。

パートナーシップ排雪に係る町内会の負担が減るということを肯定的に考えているといったご意見や、今後、冬期の生活道路環境はどうなってしまうのか不安に感じているといったご意見など、内容は様々です。

こちらの結論は出ておりませんので、引き続き慎重に議論を重ねていきたいと考えております。

先ほど有田委員からお話がありましたが、来年の冬からパートナーシップ排雪制度が廃止になるというような認識を持ってしまった地域の方々もいらっしゃいましたので、そういった意味でも丁寧に説明し、慎重に検討を進めていきたいと考えております。

また、高野座長から、本検討会は何か結論を出す場所ではないとお話がありましたが、我々としては今後の除排雪の在り方を検討するにあたり、非常に重要なご指摘をいただいたと認識しております。

後ほど議事録を精査した上で、今後の雪対策に活かしていきたいと考えております。

これまで4回に渡り意見交換していただいたことに改めて御礼申し上げます。あわせて、引き続き皆様にはご支援を賜れば幸いです。本当にどうもありがとうございました。

○事務局（若林事業調整担当課長）

これにて第4回持続可能な生活道路除排雪の在り方検討会を終了させていただきます。

本当にありがとうございました。